

第3回高砂市文化振興審議会議事録

出席者 田端会長、北野副会長、三井委員、岩見委員、渡邊委員、唐津委員、高橋委員、前田委員、森本委員、松本委員
事務局 (健康文化部) 橋本部長、東野課長、福原主幹、前川係長
(教育推進室) 富士原室長、泉田課長 (学校教育室) 玉野室長

1. 開会

【司会】 定刻になりましたので、ただ今より第3回高砂市文化振興審議会を開催いたします。

開催に先立ちまして、当審議会の公開についてですが、「高砂市文化振興審議会の運営に関する規程」に基づき、公開とさせていただいておりますが、本日傍聴希望者はおられません。

委員の皆様におかれましては、お忙しい中ご出席いただきありがとうございます。

なお、お手元にお配りしている資料の次第により進行しますので、よろしくをお願いします。

※ 配布資料の確認

2. あいさつ

【司会】 では、開催にあたりまして、健康文化部長よりご挨拶申し上げます。

(健康文化部長あいさつ)

【司会】 引き続き、会長よりご挨拶お願いいたします。

(会長あいさつ)

【司会】 本日の会議は、出席10名全員参加により、審議会規則第5条第2項の規定により、過半数が出席されているため会議が成立していることを報告いたします。

では、今後の議事進行は、会長にお願いいたします。

3. 議題

高砂市文化振興基本方針（案）について

【議長】 次第に従いまして行います。まず議題ですが、高砂市文化振興基本方針についてでございます。以前の議論をふまえて、私と事務局とでもう少し整理をしまして今日みなさまのお手元にお配りさせていただいております。事務局のほうで、基本方針案を作っていただいておりますので、説明の後みなさまのご意見を賜りたいと思います。あと、文化振興に関する高校生のアンケートの集計があがってきているので、あわせて説明をお願いします。

【事務局】 (説明)

【議長】 ありがとうございます。基本方針について、それに関連してアンケート調査の結果もあがっております。私も読みながら若干ショッキングなところもあったのですが、高校生は文化よりもスポーツが中心なのかなと思いつつ読みました。その部分については例えば今後どうやって指導者を育てていくかなど、具体的などころにも参考になるのかなと思いました。今日は大きなところをまとめていきたいので、よろしくをお願いします。まず、質問等ございましたらよろしくをお願いします。アンケートの部分だけでも結構ですので、ご質問を受けたいと思います。

【委員】 アンケートは有効回答数が347人だけでも、アンケートをしたのが何人か書いていません。学校名と3クラス、計9クラスと書いていますが、このクラス自体が何人か私達は分からないし、アンケートを出した総数が何件で、回答してきたのが何件という形でないと。

【事務局】 授業の中で回答していただきました。全員から回答をもらっています。

【委員】 有効回答数347人と書いているけど、配布数が不明ですので回収率を書いていない。アンケートの対象者が何人であったかが分からない。調査の基本なので、何クラスと言ったって、一般には分からない。基本はそういうことだから。

【議長】 訂正をお願いします。347人に配付して、347人から回答を得たことがわかるように訂正をしてください。

【事務局】 まず対象者数をどこかに表示して、それから有効回答者数を分かるようにしたらよろしいですね。

【議長】 お願いします。他にご質問がございますか。

事前に資料を配布しておりますので、ご一読いただいていると思います。早速ですが、基本方針の部分についてご意見をいただきたいと思います。先ほど私は設計図ということを申しましたけれど、ある意味この設計図をしっかりと作らないと実際作るときに崩れてしまったり、作ったものの動かしてみたら動かなかったということになりますから、この部分は皆様のご意見をしっかりと賜りたいと思います。ここからは皆様の挙手の上ご発言いただきたいと思ひます。

【委員】 資料の何番までの話を？

【議長】 基本的には資料4を中心に、その後資料5に入りますが、資料4を考える際に具体がないとなかなか難しいということもあると思うので、主には資料4ですけど、資料5を含めながらご意見をいただきたいと思ひます。また資料3について先ほど事務局の方から今日の議題にはないですが参考にしてほしい、とありましたが、実際基本目標を立てたものの動くかどうかを考えないといけなわけですね。そのためには、動かす動力源であるのは市民であったり団体であったりするわけですから、そういったところもお含みおきいただきながら基本目標についてご意見をいただきたい。

【委員】 質問をしたいのですが、第1回目から謡曲「高砂」を重要なアイデンティティとしてということですが、謡曲がよく分からないので、ものすごく基本的な素朴な質問なのですが、謡曲の歌詞が九州の阿蘇の神主さんが住の江に行くのにその途中で高砂に寄り高砂神社の入口にある大きな木に杖をつくところから枝が出たということで、通り道に高砂に寄ったという話で、九州の阿蘇の神社や住の江さんと高砂の3箇所とでつながりが何かあるのですか。通りすがりに寄っただけで、高砂が全国的に有名で、謡曲が盛んで、日本中で一番大事なところというのがちょっと理解ができません。その辺りをもし謡曲をやってらっしゃる方がいれば教えてほしいです。

【議長】 私は全く素人なので、どなたかお答えをお持ちの方いらっしゃいますか。

【委員】 905年に作られました古今和歌集に、「高砂住の江の松も相生のようにおぼえ…」とあることに基づいており、このまま読みますと、高砂は室町時代1400年ごろに能楽者世阿弥により作られました。その構想は、高砂の松と住吉（大阪）の松が相生（夫婦）であるという前提で創作されています。その元は先ほど言いました古今和歌集に基づいています。長寿と夫婦の

変わらぬ愛情を象徴する相生の松を主体とし、その松の精として老人夫婦、尉と姥を表します。そして常盤の松のめでたさをとって、夫婦和合長寿を賛美し、国の平和と繁栄を祈ります。そういう意味で謡曲「高砂」が作られているということらしいです。

【委員】 あくまでも結局お芝居と一緒に、お芝居でもいろいろなことを語っています。歴史を語るのではなくて、作られたこともたくさんあるでしょ。歴史的なことではなく、これは謡曲で、世阿弥が作ったものです。その一部だということです。よく分かりませんが、松の風景を見られてそういうことを発想されて作られた。それが謡曲として非常に広まり、以来謡曲「高砂」として発展してきたのではないかと思います。

【委員】 それと阿蘇の宮の神主というのは、作られたあらすじのスタートが、阿蘇の宮の方が行かれるのに高砂に立ち寄られたというあらすじだということと聞いています。

【委員】 あくまでも世阿弥の発想なのか、事実があったことなのか分かりませんが、ひとつの脚本ということです。

【委員】 高砂の相生の松をめでたいと表に出すために書かれたシナリオということですね。分かりました。

【議長】 他に何かご意見ありますか。資料2の体系図をご覧ください。先ほど説明でもありましたように、みなさんのご意見の中で全国的に有名な謡曲「高砂」を使わない手はないだろうという前回までのご議論で、ひとつのコンセプトになりました。ただしそれは目標にはできないと、つまり謡曲「高砂」を広げることが文化を作ることではありませんので、どういうふうに基盤として活用するのかということ、こういう位置づけにしています。こういったことについてご意見やご質問がありましたらどうぞ。

【委員】 以前いろんな意見が出たと思いますが、フェスティバル形式にするとか、その中で1日だけで終わらせるのではなく、いろんな子どもたちの文化もありますよね。ですから器楽もあればいろんな劇もありますから、そういうことを1週間の間にするとか、いろんな形を作り出すという方向性もまたひとつ考えられるのではないかと考えています。そしてその中に必ずこの謡曲によりながらするということですね。そうすると高砂のまちは1週間かけて子ども達が休みのときにこういう催しをしながら、全国発信しているなということが分かると思うので。やはり続けていくようなフェステ

ィバルにして、1回きりで終わるのは絶対だめなので、続けていくという方向性を考えてもいいのではないかと思うのですけども。

【議長】 おっしゃるようにこういうような位置づけになっていれば、必ず謡曲「高砂」が入っていても別に不思議ではない。主催者の側もこの図を見ていけば当然そういう形になるだろう。

【委員】 そういう形をしますと、商工会議所の経済的支援も得られる、また高砂には大企業がありますので、企業の方にもご支援をお願いできる。また政治家の方もおられるが、そういう方面からも応援していただく、そういう方向性も大きく考えていってもいいのではないだろうかと思うのです。

【議長】 シンボルとするということに関しては、みなさん大体こういう形でいいというご意見でよろしいですかね。基本目標で、まとめ方として6個にまとめました。何が削られたかといいますと、情報発信の部分を大きな枠から外しています。どこに入っているかといいますと、2番目の文化情報の収集、発信というところで、文化を育てるところに入っているわけですけども。もちろんひとづくり、魅力づくり、いずれも情報発信がなければできないわけでございますので、そういう意味では情報発信は全体にかかわることだろう。ただどこかに入れるとすれば、活動、発表の場というところもありますので、ここに情報発信を入れているということでございます。このことを議論の対象にさせていただければと、思います。

【委員】 非常にわかりやすく丁寧に作っていただいて、大変だったでしょうが、ありがとうございます。資料によると私個人の考えですが、市民一人ひとりが文化の担い手というのが一番大事だと思います。3つの基本目標があるが、そう考えると一番大事なものは、文化を育てる環境づくりではないかなと思います。ひとづくりというのはピンとこない。結果的に一所懸命それを行うことで人が育っていく。人を育てて文化の発展をやれということではなく、それはおこがましいというか私は違うと思う。話は違うが、行政の方が安全安心なまちづくりと言葉で言われるが、安心を感じるのは我々であって、行政がするのは安心なまちづくりをするべきである。我々がそれを安心だと感じるということが目的であって、行政が安心だろうというのはいつもおかしいと思う。ひとづくり、未来というのはある種、結果でいいのではと、考え方としてはね。図はこれでいいが、やはり現場の中で市民がひとりでも多くそれをサポートするか、物的に環境的に援助していくのが行政の仕事であって、もちろん物だけでなくリーダーとのかかわりあいを進めていくソフト面もあると思いますけどね。その現場で一所懸命や

っている方に関わって支援していくというのが大事。施策を行っても現場の者と溝があったら動けませんよね。やはりせっかく税金使うなら現場の人がそれを私は望んでいたと、そういったものを作ってもらからいいのであって、物を作ったからそこに入ってやれというのはしらけてしまう。私は現場のことを先に考えてしまうのですけども。図としてはこれでいいと思いますが、はじめの環境づくりのところを大事にやっていただきたいと思います。

【議長】 ひとつづくりというのはおそらく環境の中の一環なのですね。みなさんの議論の中で指導者ということが結構ありましたね。指導者が十分じゃないのではないとか、この人だけに頼っている状況という議論が出ましたので。ひとつづくりには指導者、先ほど言った環境の部分も入ってくるのかもしれないですね。ですから、ひとつづくりというのは、結果的にこういう人ができるのだということで、こういう書き方ではおかしいというのはわかるところがある。市民一人ひとりが文化を愛する、市民一人ひとりのひとつづくりと言うならば、結果になるだろう。

【委員】 図としてはこれでいいと思いますがね。

【委員】 文化を育てる“環境”という言葉が私はそういうふうに感じられるのではないかなと思います。文化を育てる“地域”とかだったらいいが、環境づくりと言うと、人が文化を育てるように周りを作らないといけないと、そうではなくて、その人自身が文化を愛して、育てていくという形にするためには、ここに環境という言葉を入れるのはそぐわないと思う。2番目にもひとつづくりとありますけど、文化を育てるひとつづくりでもいいわけですよ、環境づくりでなくても。全部ひとつづくりとしてもいいわけですよ。環境づくりをしようとしたら行政という形になるし、行政が作ってその中で人が育っていく、そうではなくて自分自身がそれぞれ自分で育っていかないとけない。その辺りの表現をどうしたらいいか。この表現になるとそういう感じに見られてしまうと思う。

【議長】 基本目標とは何ぞやという議論だと思う。基本目標は人ができなければいけないだろうというのが両委員のご意見で、基本目標の中になぜ行政の目標が書いてあるのだということが指摘されました。書き方としては、これは行政目標で、そこはちょっと違和感があるということですね。委員も目標は文化を愛する、ふるさとを愛するひとつづくりというのがみなさん共通なのに、それがあたかも政策目標みたいに書いてあるので、そうではないだろうということですよ。ここは書き方を考えた方がいいかもしれま

せん。

【委員】 今すごくいいことをおっしゃっていました。本当にひとづくりだなと思いました。文化を育てるひとづくりという言い方がいいなと思いました。それはなぜかといいますと、先ほどのアンケートの中で高砂にゆかりのある人物の項目を見ましてもあまりにも今現代的な名前が出ていまして、それは違うだろうという思いがありました。やはりそれには文化を育てるためのひとづくりを、いろんなことを教えていかなければいけないと思い、とてもいい考えだなと思いました。

【議長】 基本目標をどうするかまた考えたいと思います。これは行政表現なのです。方針を作って、目標を作って、施策を作って細かいところを作っていますから。これにこだわる必要はないと思う。どうぞご意見を賜りたいと思います。

【委員】 文化振興の体系で話をすればいいのですよね。よくできていると思います。今までがあって、今があるわけですから、今まで環境がなかったのかということも含めて今回それに対してどうかと。ただひとづくりに関しては2番目にひとづくりというのがある、もちろんひとづくりは大事ですけど、ふるさとを愛するというのが私としては、今の子どもたちが高砂を誇りに思っているのか、誇りに思っていないのかよく分からないのですが、誇りに思っている、すなわちふるさとを愛している、誇りに思えるものがたくさんあるのです。それがしっかりと大人の世界に浸透していない。大人が高砂はこれだけ素晴らしいということを伝えないから子どももそう思わないと私は思っている。いいものなのにきちんと理解していないところを1回掘り下げることが大事ではないかと思っていますが、それは認識違いでしょうか。

【議長】 掘り下げるというのをもう少し具体的に言っていただけると。

【委員】 私が小さいころ、昭和40年代初めですけれども、高砂市に住んでいて、高砂市民であることは誇りでした。いろんなことが他のまちよりも進んでいました。それはなぜかというと工業化時代の工業のまちで、財政も豊かで、いろんなものがいろんな形でできたり、福祉関係も充実していた時代に育ちました。高砂市歌もその時代の歌なのです。全然今とあっていない。それから全然変わっていない。過去に繁栄したというところで、買い物にしても文化的なものにしても、神戸とか大阪へとなくなってしまっていますが、それはそれで向こうに行かないといけないものもありますけど、

高砂でしか味わえないとか、高砂でいろいろできることがあって、だから高砂なんだというものがあるはずなのに、そのアピールが前回申し上げたように何か引き出しに入っていてなかなか出てきていない。それをしっかり出して、それをきっちり理解させて、大人も理解して、それによってもう1回高砂をどうするかという気持ちを持ってやっていくといろんなことができているのではと思うことを掘り下げるといふことではと言いました。

【委員】 高砂だけと違う。兵庫県下全部そうです。12月13日に文化の集いをしました。例えば、西宮の音楽ホールの活用、東日本へ応援に出すというような意見もありました。なかなかふるさとの文化伝承を語る人がいない。昭和40年代、50年代、60年代、平成とこの間に各地域が空白になってしまいました。経済活性化とか環境問題とか他のことに目が行ってしまいました。最後に全体会で知事に言いましたが、高砂でも謡曲がとだえかけていると、だから各地域の伝統文化を保存することに力を入れてくださいと申し上げました。兵庫県だけでなく、全国的なことだと思います。私たちがなおざりにしてしまいました、私たちの年代のせいです。家族制度も一緒に。だから今委員がおっしゃるように今回復しなかったら、文化だけでなく大変なことになると思います。私たちは経済活性化や環境のことばかりに目を向けてこのことをなおざりにしてしまいました。高砂の問題だけではないが、高砂はいいものを持っているのだからアピールしてやらなければいけないと思いました。

【議長】 ありがとうございます。これは条例とかかわると思いますが、なぜ今文化なのかという説明がないまま文化振興条例自身は文化振興によるまちづくりというものが書いていますけど、今まで製造業中心でやってきた経済繁栄を求めてきたまちづくりから、心の豊かさ、市民一人ひとりの豊さを目標とするようになってきた、それが本来背景にあって、ここには出てこない。いきなり条例の話から入るので、みなさん何となく違和感があって。それがあれば謡曲「高砂」がなぜシンボルになるのか説明がつくではないかと思いますが、どうでしょうか。

【委員】 よそも同じようなものが出てくると思う。高砂のオリジナルがあるのですよ。謡曲「高砂」だけではなく、高砂高校ジャズバンド部の活動が高砂南高校とかへも波及しています。高砂市の中学校の部活動の中で吹奏楽部は全校にあります。美術部は3校しかない。今アートタウンと私は言っていますが、中学生が求めている。求めているのではなく、先生がいないのかもしれない。だからそのへんのミスマッチというものについて。運動部でいうと陸上部、野球部、ソフトテニス部、柔道部、剣道部は全部あ

る。あとは全部にはない。文化部にいたっては全部あるのは吹奏楽部だけ。だから中学校の今の部活動の現状も踏まえて考えていく中で、どういうふうにその人達に、場を提供してそういうことを考えることができる環境といますか舞台を作れるかという話と、もうひとつは横並びで他の市と同じようなものを作ってやってる精神ではなく、オリジナルのもので、確かに謡曲「高砂」は私は日本一だと思っています。日本にひとつしかないもので、日本にひとつしかないものは世界一になる可能性があります。世界一になるものは、海外の人が来たらあそこに寄ってみたい、聞いてみたい、見てみたいというものになりますよね。それが高砂にはあるのですよ。あるからそれをアピールして活かしていくことをやったら、底辺からの動きとトップからの動きと両方でうまくそういうものができていくと私は思う。他市とは違うオリジナルなものを他市とは違うオリジナルな取組みで、今回考えて行くことが、未来の高砂の文化振興のためになると思います。

【議長】 中学生に舞台をあげるのは、ボトムアップのイメージで文化を育てるということですね。トップダウンというのはちょっとイメージがよくわかりませんが。

【委員】 世界一ということをもっと発信すべきだと。謡曲「高砂」は忘れられようとしている。忘れられて今能舞台が朽ち果てるからほっとけないということで、今再建に向けた動きがありますが、建物だけ作っても自己満足です。建物とソフトがあって、それがひとつの価値を作って、発信していくということを並行してやっていくといろんな展開が見えてくると思います。

【委員】 とりあえずは項目というか文言を決めて、やり方というか手段に。たまたま同じテーブルになって、神戸の先生に「こちらは講師がいなくて困っている」ということを言いましたら、早速「言ってもらいましたら私のほうから派遣します」ということを言っていたのです。公民館で自由科目ではなくて必須科目として昔はあったのです。謡曲が必須科目として市からの講座としてあったのです。それを回復してくださったら講師は姫路の人あるいは高砂の人を派遣しますと約束できています。しかし、今この話が動く手段が決まっていなかったらできない。一応体系図が出来て手段が市の方で決まって、そういうふうな形で公民館の必須科目として高砂の謡曲講座をしたいということは言っています。形に表さなかったら文言に書いて口に出しても仕方がない。実際どのような形にするか決めて、順序があるから一応項目ができてから、項目を決めることが先決です。

【委員】 具体的な話になっていて、水を差すようなのですが、公民館で必須にするとか、学校でやれという話になっても、実際やるものとの意識というか、そこを丁寧にやっていかないと、ただ上からというか、審議会で決まったからやれというのはいけないし、難しい。

【委員】 だからこれがきっちり決まってから手段をどうするのかということに進まないダメで、その手段の中のひとつということでそれが取り上げられたらいい。頭からそう言っているわけではない。一応とりあえずは体系ができなかったら何もできない。何もなしにこの体系ばかり考えていても、先の手段も考えておかないといけない。

【委員】 やるときには丁寧にさせていただきたいと思います。

【議長】 具体的にどうやって進めていくかはまだこれから先のことでして。

【委員】 その辺りの差があったら、押し付けられている感があったらできないのです。というのは私の知り合いが謡曲をやっていて、松本先生と一緒にある中学校へ教えに行っています。そういう話を聞いたので、なかなか難しいなと思ひまして。

【委員】 今おっしゃる分については、講座として、もちろんのこと応募してもらってです。高砂公民館や3つくらい公民館で講座がありました。私も謡曲を始めた頃はその講座から入りました。それで20周年のときに能の舞台上で一緒に出させていただきました。それは公民館の講座から始まったのです。講師がいらないから今途絶えていますけど。民舞とか他の講座は自由に申し込んでいますが、市の方の必須科目として謡曲の講座を1つでも2つでも公民館で作られて、もちろん募集をして、入ってきた人に初心から教えていくという形をね。そういう形でないために、学校の方に教えに行ったり、謡曲の合唱団は苦肉の策です。講師がいなくて、正式に教えられないから苦肉の策でせめて謡曲「高砂」の小謡だけでも謡えるようにしてほしいということで、松本先生にお願いをした。切らせないためです。本来の謡曲の講座をするというのはそういうものではない。そういうことでそんな手段でもとらないと仕方ないとは思っていますけど、とにかく先に体系ができないと先に進めない。

【議長】 両委員とも、おっしゃることは1番の伝統文化などを学ぶ機会づくりということに対していろんな考え方ができますということだと思います。

【委員】 特化した話とは違って、基本のことで、自分の意見を述べさせていただきますと、まちづくりはひとづくり、ひとづくりはまちづくりというように関連していると思います。ですから、最終的にひとづくりが大事になってくると思います。私は基本目標を3つに分けて正解かなと思います。この3つの基本目標は横に独立していますが、丸が3つというか、この基本施策を見ると、ひとづくりの中の文章も環境づくりに関係しているし、魅力づくりにも関係しているというように3つの輪が重なるそういうイメージかなと思います。文章的にも、基本目標のひとづくりをするためのことを、環境づくりの基本施策や施策の方向の内容から見てみても、ひとづくりをするために人材の発掘が必要だし、ひとづくりをすると活用もできていくし、発掘もできていくし、保存もできていく。保存や活用をしていくとひとづくりもできていく。そのあたりを絡めたような形になれば良いかなと思います。そういう関連性があるという意味で言ってもこの3つに分けたのはなかなかうまく分けたかなと思います。

【委員】 未来へつながる魅力づくりは、この文言だけだったら何のことか分からないですね。図を見て、これは文化の振興だと書いてあってこそ分かるけどね。この文言だけだと、未来へつながる魅力づくり、何の魅力か？というところで、3つの言葉はものすごく重要だと思います。

【議長】 3つ目は経済的なところが少しかかわってくる話で、先ほど少し言いましたけど、高砂は工業都市として発展してきて、それではない新しい文化を創造していかなければならない。これは条例の基本理念に書かれていて、文化活動、福祉、教育、地域社会、産業等他の分野の活動に、という部分が魅力につながると、そこで書かれている福祉とか教育とか産業とかがイメージされているだろうと思いますが、もちろん文言についてはあくまでも事務局案で、もう少しこういうのがいいと言うものがあれば変えられます。

【委員】 そういう意味では“環境”とありますけど、これでいいと思います。環境というのはハードではなくて、当然中味の基本施策の中ではソフト面のことでも書かれているので、むしろ環境は人為的な、ソフト面のことだと思うので、環境というのは建物だけではないので、僕はこれで環境という言葉はいいと思います。

【議長】 そうですね、環境づくりはいいのですが、先ほどどなたか舞台という言葉をおっしゃっていましたが、舞台ということであれば、せつかく文化のことですし、いいかなと思いました。

【委員】 高砂をアピールするのに謡曲が全面的に出てくるだけでは非常に弱いと思う。他に何があるかと考えるとやはり謡曲「高砂」ですけども。時代の進み方がものすごく速いです。音楽の世界をとっても、クラシック音楽が日本でいったいどうなっていくのかという懸念もあります。大阪市長はどんどん文化面なり、音楽面なり削ったりしています。関西と関東を見ても、音楽事務所は関東に移っています。大阪市長も盛んに関西、関西と言っはいますが、大阪都構想など経済は活性化しても、実際問題、若者と行政とが発信していることのいろんなずれが非常に大きくなってきていると思います。以前はクラシックコンサートに行っても音大生がたくさんいました。このごろはコンサートに行ってもご年配の方が多くて、若い音大生がいないのです。学費が高くてなかなか音大にやれないとか、音大を卒業しても就職がないとか、少子高齢化社会という現状もありますが、今オーケストラを支えている年配の方がいなくなるとどうなるのだろう。N響アワーすら3月で放映が終わり、いっぱいいい演奏をなさる方々がいらっしゃるのに、そういう演奏を放映したり、文化をテレビで発信しないのが日本の情けないところだと思うのです。ましてや関西のオーケストラに至ると、いつ潰れるか分からないという状況の中で、なかなか音楽家自体も育ちにくい。もちろんできる人は世界のトップクラスにいますが。そういう現状において、若者たちは日曜日とかどこにいるかといえば、だいたい家にいる。学生たちもバイトに精をだしている。コンピュータを使って偶像の世界でいろんなものを作り上げて、ゲーム感覚の音楽を作って、レゲエのような何回も繰り返す言葉の文化がどんどん発展してきている。海外の人から見ると変な現象が起きている。若者が文化をある程度引っ張っていて、ファッションなどでも、海外からも日本が面白いということで、日本のまねをするという現象が起きていますけども、そういった中で、今の若者たちが未来に希望をもてない。できるだけお金を使わず、日曜日自宅にいてコンピュータ、ブログをする。お金をかけてコンサートに行かない。そういう中で、その土地の歴史を勉強するのは非常に大事なことだと思います。けれども過去のものに頼りすぎているのではないかなど。佐々木すぐる先生の「月の沙漠」ですね、いい曲ですけども、今の子ども達がどのくらい知っているか。謡曲をしなさいと言っても、学校で流したり、何かのときに聞かせる、謡う機会を作る、それは情報発信になっていいのですけども、未来に向かっての文化発展ということに関しては、ちょっと若者たちが参加していきたくなるテーマではないと思うのです。現場の中学生は、吹奏楽で頑張っているし、先生方も非常に頑張って、休みがないぐらいに、コンクールとかいろんな舞台を作られて、先生も学校の仕事だけでなく、日曜日も非常によく頑張っておられます。学校は学校で体育祭

があり、音楽祭があり、年がら年中、もちろん好きだからこそやってらっしゃるのでしょけれど、一所懸命やってらっしゃるのですね。その部分と、市吹も活躍していますけれども、市吹の若い人達の意識と行政、あるいは、音楽が好きだからやっているのですけれども、高砂市を発展させると、みんなが高砂市のためと思わなくいいのですけれども、その辺りのつながりが、行政の意思と、若い団員の意思とかけ離れた部分があると聞いていますし、その辺りの意志の疎通を、実際にこれから担っていく、実際にやっている人達と行政とがどう結びついていくか、そして高砂をどう盛り上げていくか、協力できるかというところを考えないといけないかなと思います。どう若者達を取り込んでいくか。

【議長】 未来へつながるといふところの部分の記述が完全に抜けているのではないかと、いふご意見でしょうか。

【委員】 姫路合唱コンクールというものがあって、他市からも参加でき、毎年参加校が増えています。地域色を出すということと、それが全国的に通用するというレベルまでもっていかないといけないと思うのですね。例えば、管楽器ソロコンクールを作るとか、他市からも若い人が受けに来るような、そういう形を作って、人を呼び込んでいく取組みをする合唱コンクールにして、若い人達が、自分も参加したいなと思うようなものが提示できたらいいなと思います。

【議長】 ありがとうございます。謡曲「高砂」をシンボルにするという前回最後に申し上げたと思うのですけれども、謡曲「高砂」だけという意味ではなく、つまり高砂とは文化を大事にするまちだよということのシンボルなわけですね。そのためには謡曲「高砂」をしっかりしないといけないというのもあるのですけれども、これだけの話ではございません。ですから、あのまちは文化を大切にすなまちなのだといふところのシンボルという位置づけだと思っています。先ほどおっしゃったところは、このシンボルの部分だけでは若い人達を惹き付けられないのではないかといふのは確かにご理解いただくには時間がかかるといふと思いますが、何かいい方法はありませんか。たとえば、未来につながる魅力づくりといふことで、文化交流の促進や魅力あるイベントの実施とかありますね。ふるさとを愛するひとづくりの中では、子どもの学習機会の充実とかありますね。文化を育てる環境づくりの中では、継続だけでなく、発掘とか活用とかあるわけですね。つまり基本理念にありますように、創造性の部分の尊重といふこともあるわけですから、その部分を具体的にたとえば基本施策なり施策の方向なりにもしあれば出していただければ。たとえばこんなふうなもの。先ほど具

体的なことをおっしゃっていただいたので、もっと大きめに、若い人達が文化を創造する側に入るようなことがないかということだと思っております。

【委員】 多分委員がおっしゃりたいのは、このベースがすべて“わがまち「高砂」を全国発信～謡曲「高砂」をシンボルとして～”、これに繋がっていると、子どもを対象とした活動、機会の充実、伝統文化の体験学習ですね、これも謡曲「高砂」に繋がっているというふうな、この図をそういう目でみれば、そういう解釈もできるから、そうでないだろうと。子どもに突然に謡曲「高砂」ばかりしても、もう今の状態では受け付けないだろうし、発展しないだろうと。私もこの図を見たら思います。この図の中にですね、謡曲「高砂」をベースにして高砂の文化を創っていくけれども、今の情勢にあわせて文化を振興していくという形の図であればいいけど、この図を見ると謡曲「高砂」だけをとにかく子どもに教育して、市民にも理解を求めてという形に見えるからそういうふうにおっしゃると思うけど、この図形の中に謡曲「高砂」はベースにはなるけども、それ以外の今現在の文化を発信する、振興するという形に直せばいいわけですよ。

【委員】 謡曲「高砂」はあってもいいと思うのですが、具体的に人材の育成と出されてもどうやるのかと。

【委員】 謡曲「高砂」のところに、子どもの教育まで書いてあるからね、そのことだけに考えてしまうわけで、もちろん子どものときから謡曲「高砂」を理解してもらわないといけないが、それだけではないというところで。

【委員】 もちろんきちんと習って聞いたらいいのですが、例えば学校の授業で作曲があるのですね。それを謡曲「高砂」の歌詞を使って作らせるとか、その中に織り込んでいくのも可能だと思うのです。謡曲「高砂」の歌詞だけでなく、いろんな名所旧跡とか行って見て、好きな文章を使って作詞しなさいと、そういう作詞作曲コンクールで地域の独自のオリジナリティをもって育てていくことができるのではないかと。謡曲「高砂」というものを利用しながら、そこから発展させることは可能だと思うので。謡曲を使うなということでもないですし、それとともに今演奏できる若い人達、エネルギーのある人達に、もっともっと協力していただく体制をとったらいいのではないかと思います。それで高砂の曲を作って合唱コンクールを作っていくとか。

【委員】 県の施設でも赤字になる場合があります。たまに有名な方が来られて完

売になったりすることもあります。それが今現在の現実です。子ども達とのギャップね。それをどういうふうにして埋めるか。両方を上手に融合させないといけないというところですけども。これを図形や文言にしたら…。

【議長】 図形にすると確かにおっしゃるとおりですね。位置づけなのですが、委員がおっしゃったことは、今まで高砂というのは工業都市であったと。それを変える、つまり文化を大事にする都市に変えていかなければいけないと、そのひとつのシンボルだという位置づけです。ですから謡曲「高砂」だけという意味でなくて、たまたま全国的に良く知られているから、高砂は文化を大切にすまちなのだというイメージがつく、これが大きいだらうということが一番下に置いているわけですし、そこは多分ご理解していただけたと思うのです。その上で先ほど私がお願いしたのは、基本施策の中、施策の方向の中にこういうものを入れたらどうか、アイデアをいただきたいと思うのですが。

【委員】 シンボルとしての謡曲「高砂」をもうちょっと勉強したいのですけども、先日申義堂がオープンしたときに、高砂中学校で謡曲「高砂」が舞台上で謡われていました。あのグループは公民館活動で習っているグループだそうなのですが、そういう謡い方が正しいのか全く分からないけど、前回謡曲「高砂」が羽織袴できちんと正座して謡わないといけないみたいな見方がここでは出ていたと思いますが、今も苦肉の策で公民館の謡曲はやっているという形ですが。実際謡曲とはそういう肩が凝るようなものでないと本当の謡曲「高砂」とは言えないのですか。

【委員】 場所によります。すべてのことがそうですが、正式に発表する場合は、謡曲は能で、能そのものが主役であって、いけば影の謡です。歌舞伎の影の謡が長唄とか常磐津のようにね。だからそれが出て謡曲だけで露見するという事はないのです。けども影のものだけどやっぱりきちっと袴をはいて黒紋付を着てと、そういうことは決められたことなのです。けど謡曲そのものを一般の人がね、謡って理解をして広めようというためにはね、それは合唱団で、私達も白黒のコーラスの恰好でやりましたけどね。それはそのときの臨機応変で、正式のルールは民謡でも何にしてもあるでしょ。それはそれで決まりはあるのです。

【委員】 正しい姿で、正しい謡い方をしないと、正しい先生について覚えないと謡曲「高砂」と言えないようなことだったら、これから若い人達には謡曲を広めていくというのは不可能な話だなと思ったので。

【委員】 荒井でも謡曲のグループが公民館で練習しています。普通の平服で、きちんと正座して、先生がおられたり、おられなかったりしてお稽古されていますが、やっぱり稽古するためには平服で。なかなかその人達でもどこか舞台に出てきちんと服を着て謡う機会があるかという、そんな人達でもなかなかない。

【委員】 10年ほど前までは公民館の発表会でも出演して謡ってくださっていたのですよ。先生がおられなくなり、公民館での講座がなくなったので今謡曲「高砂」の合唱しか日の目を見ていないのですけどね。実は公民館では発表会に出てくださっていたのです。

【議長】 なんとか底辺では繋がっているということですね。それは切るわけにはいかないと思いますので。ちょっと話が時間もせまっていますので、先ほど委員から3つに分けるのはいいのではないかとということ、「づくり」という言葉から何か政策目標みたいになってくる。づくりという言葉は無くしていただいて。たとえば1番のところは文化を育てる舞台。これはどうするかというと基本施策の中に発掘、活用があるとか、あるいは発表の場をつくると。それから文化を愛するひと、これはおそらく委員からあった、これが本来の目標なのかというところがある部分だと思うのですね。最後が文化をつくる魅力、これは委員がおっしゃっていた、これから新しい人達が文化を創っていかねばいけない、そこの部分をもう少し整理させていただいて。たとえばこういう形で施策の部分の入替えもあるかもしれないですけども。委員がおっしゃっていた3つの輪が重なる部分があるという、これはまた少し書き方を工夫させていただいて、事務局でも少し考えてもらおう。3つに分けるということにご異議なければ、「づくり」というと政策目標になってしまうので、それは少し違いうだろうと、みなさんの雰囲気はわかりましたので、もう少し書き換えさせていただきます。それから何度も出ている謡曲「高砂」ですけれども、先ほど申しましたようにいわゆる工業都市高砂から文化を基盤とする都市に変わるというシンボルになります。ですからそのような位置づけに書き直していただいて、これは全国発信という場合に前へ出ていますので、謡曲「高砂」ばかりが繰り返されるように思われるかもしれませんが、意味としてはいわば文化を愛するまちのシンボルとしての謡曲「高砂」と、こういうふうな位置づけにもう少し分かりやすいように変えていただく。位置的にはまたご意見をいただきたいのですが、多分このあたりしかないと思うのですね、場所的にはこういうものをここに置くしかないと思うのですけども、そういう形で誤解のないようにさせていただきたいと思っています。あと例えば

施策の内容としましては、ここでは保存、活用、発掘とかですね、連携とか人材育成とか、それから委員がご懸念されていましたが学習機会、これはもう学校教育、社会教育にかかわる部分で学習機会というところ。それから文化交流、産業振興というところだと。何かこのあたりでもう少し不足している部分があるのではないかと、いかがですか。

【委員】 基本的にはずいぶん良くできていると思います。基本施策の中で文化遺産の保存、発掘、活用。高砂市は素晴らしい文化遺産があると思うのです。まずその文化遺産が、今すでに埋もれてしまっている。だから保存の前に、もう一回発掘すると。そして、保存、活用と。それで保存するためには、高校生にアンケート調査をされています。その中で高校生の感じ方が、歴史地理に関して、学校で細々と学習した中で何人かがそれに関心がある。地域では0。あるいは団体では0なのです。ということは委員が言われたように、我々の年代がその原因を作ってしまったということがあると思いますね。ですからそれを見直すということも含めて、まず発掘、掘り返すということ、そして基盤にすえるのが謡曲「高砂」でよろしい、こういうすばらしいものもある。そしてこれがあればこれはどうだと、私の地域ではこんなものがある。例えば神爪では山片蟠桃、素晴らしい歴史を発掘して今に伝えているのです。そういうようなことも、自然にこれもあるじゃないか、あれもあるじゃないかと、こういうことに繋がっていきます。この基本体系、これはいいと思いますけども、発掘、保存、活用、この順序を変えることによって、もっともっとみんなが関心を持っていてくれるのではないかと。それと我々の責任、今の若い人の義務、埋もれたものを我々が継承していこうという、そういう機会を作ってあげるというのも。

【委員】 私らにも責任があるのですよ。現実には。

【委員】 それに関連して、今言われた発掘というのが大事だということの中で、施策の方向3ですけど、地域の宝、ゆかりの人物などの顕彰というのが上にきていますが、私はここが顕彰ではなくて発掘じゃないかなと思います。顕彰というのはこの丸の部分で、あくまでも実際発掘するために顕彰するというか、次の文章の「高砂ゆかりの人物など顕彰に努める」というところの顕彰を、ゆかりの人物とは今現在の人も含めてと考えていますが、ここも顕彰ではなく発掘に努めるというのが良いのではないかと思います。発掘することで、人材とかもたくさんあったり、例えば、まちの井戸がふるさと文化財第1号になったとかありましたが、地域の人知っているまちの良いところやすごい人というのは埋もれていることが多いのですね。そういうものや人を発掘していくというところで、ここを発掘に変えたら

いいかなという気がしました。

【議長】 ありがとうございます。

【委員】 今お二人の方が言われていましたけど、そういうことはやはり底辺の方で、ひとつの例として学校の教育の中でも、生徒に自分の地域にどんなものがあるかということ、ひとつの題目を与えてですね、グループに分けてでも、自分達の地域にどんなものがあるか1回探して顕彰してくるように、それをグラフでも絵でもどんな形でも、こういうものがあるということ、やはり1か所の学校だけでなく全体的にそういうことを取り上げて、地域の文化にどんなものが埋もれているか、自分達で調べないと分からない。1回聞いてもほかのことを聞いていなかったら分からない。自分達で探してきたことはいつまでも残るから、そういう何かひとつ自分達で歴史を覚えたり、自分達はこれだけのことを調べてきたということを学校で発表する。それがひとつの文化の発展に繋がっていくと思うのです。私が言うと学校に押し付けたらいいじゃないかという意味ではないですけど、若い人に覚えてもらうにはそのあたりが近道ではないかという勝手な話ですけども、そういうことも大事ではないかと思っています。それからもう1点だけ、先ほどの基本方針の文化を育てる、ふるさとを愛する、未来のことですが、未来の魅力というのは、ある程度できてきてこそ初めて未来があるのであって、これはひとつのバックアップを、後ろというか、あげているようなものでね、1番目と2番目の2つが一番大事だと思うのです。その中でいろんな体験をできる窓口とか、公民館活動の中でも教わる教室が広がるのがいいのではないかと。文化的なことを学校の中で生け花とかやっているかということ、していない。ですから学校の中でも選択する部門が1つでも2つでも増えるほうがいいと思うのですね。やはりそれが基本的に広まる方法でないかと思います。

【委員】 今の話はもっともだと聞いていたのですが、いいものがあるのだけど、今それがないということは忘れさられていく必然性や状況が現実にあったのではないかと、本当に大事だったら残っていくはずですからね。自然にすたれたものを発掘するとなるとエネルギーがいる。もちろんそれはいいものだと思いますよ。そのあたりを事務局がもしするのであれば、つなぎをどうしていくか。我々の責任といってもどうにもできない。実際問題難しい。具体的に竜山の古墳などを案内してもらうことがあり、子どもに希望をとったのですがほとんど来ない。現実無理やり連れてきて参加した状況があります。お話は分かりますけど、やっていくのは大変だなという気はします。

【委員】 これを見ていて何か全然バラバラというか、横に謡曲「高砂」をシンボルとまとめて書いているけど、この3つが1つにまとまらない、文化に繋がらない感じがずっとしていた。私の考えだが、文化という言葉があとの2つに出ていない。こういう言葉を使って欲しいという意味ではないけど、私なら、ふるさとの文化を愛するひとづくり、ふるさとの文化を育てるまちづくり、すべてを1つの文化ということに一貫して繋げると納得がいく。市政方針ならこれでよいが、文化都市を作るということでは、すべてに文化というものが繋がっていないと。それで何か全部バラバラという感じがしていた。ふるさとの文化を愛するひとづくり、ふるさとの文化を育てる地域づくりと、そうするとずっと文化に繋がる。

【議長】 「づくり」とすると、市政方針演説的で、行政的な書き方なので、資料4で見ていただくと政策的です。でもそうではないだろうというご意見です。そのあたりを変えさせていただいて、要するにこういうまちを目指すというところを明確にするということにしたいと思います。それでよろしいですか。

【委員】 おおまかに見たら1番最初の文化を育てるの中に、全部後ろの部分が入っているはず。全部上につくはずなのに分けているから具合が悪い。

【委員】 初めにやはり文化というものが全部に共通してなかったら。先生にお任せしますので、そのところを上手に統一した形で。

【議長】 事務局と調整していきます。施策の基本目標の文章は、これでもいいかなと私は読んでいたのですが、皆様のご意見ですと、これを見ると行政施策が目標みたいに見えてしまうので、本来はまちの目標だろうと、このあたり書き方を変えて「取組みを進めます」など行政目標っぽいので、これはちょっと違うだろうとのご意見です、まちの目標だろうというご意見です。これは書き方を事務局と相談して変えます。目標はあくまでも文化を基盤とする高砂のまちというのが目標であるので、変えさせていただいて、先ほど委員がおっしゃったように文化というのを統一して入れていきながらやっていきたいと思います。施策の部分に関しては、委員から発掘を重視するということが出てきました。委員から出てきた地域という言葉はどうするか悩んでいます。他の委員からも地域という言葉が出まして、多分委員がおっしゃっている地域は、高砂市内における地域という位置づけで、そういうような位置づけであれば施策体系の地域は高砂市全体を示しているのです、そのあたりを整理しなければならないと思います。例えば、

資料3ページの担い手のところの市民は、高砂市民ということを書いています。もしかしたら市民という大枠のくくりだけでは委員からご指摘のあったように分かりにくいので、そのあたりを踏まえて地域という言葉をもう少し活用しながら、密着したところも、委員がおっしゃったいわばボトムアップなのかもしれませんが、そういったものをもう少し強調するような部分を入れさせていただこうと思います。委員がおっしゃった若い人達をどう巻き込むか、世代の話ですね。ここでは次の段階になってきますので、実際に進めていく上での話ですので、そこでまた具体的にご指摘をいただきたいと思います。

【委員】 文化を育てる人というのは大事です。どこにも人は噛み合ってきます。謡曲「高砂」は、やはりシンボルというのは、絶対いるのです。綿々と昔から室町時代からと言いつつ、やはり何かがないとだめなんです。そのためにはフェスティバルとかをして、場だけでなく内部においても、また場外においてもいろんな若者が参加できるフェスティバル、例えば謡曲の場もあれば、吹奏楽の場もある、歴史を語る場もある、そういう催しを1週間に渡って続けていく。高砂は文化に関してすごいな、そういうことをやっているまちだなと思う他市にはないオリジナルのものを作り出すことを考えたらどうか。

【議長】 例えばヨーロッパでは人形劇の町とかいうと、人形劇のような昔からの伝統もあるが、人形劇に関わるような最新のことをやっていたりする。そういう意味ではせっかくある資源を使いながら伝えていくというのが必要になっていくだろうと思います。

【委員】 謡曲「高砂」をシンボルとしてということですが、わかりにくければ謡曲「高砂」の精神をシンボルとしてというふうに替えるのも良いのではないのでしょうか。私は大学時代や青年会議所時代に他地域へ行ったとき高砂を説明するのに、謡曲「高砂」を説明し、高砂はめでたいまちで、その住民だということを自慢していました。謡曲「高砂」をシンボルというのは、めでたいまちということで、めでたいから高砂に来てもらったり、高砂を発信したらめでたくなるイメージがあるので、そういう精神をシンボルとして全国に発信していけたらいいと思います。

【委員】 高砂のまちへ行くと何か幸せをもらえるという心理的、精神的なものはすごい癒しになるのですよね。だからそのあたりのプラス面を考えながら、謡曲「高砂」を前面に出していく方針がいいのではと思います。

【委員】 3つの切り口のところで、検討していただきたいのは、「文化を育てる」という問題について、条例ができたから育てると、今までどうしていたかという流れ、それに対して再び作ろうとしているのか、あるいはもっと振興していくのか。そこだけ検討してほしい。「育てる」という言葉の使い方ですね。今まで何もしていなくて育てるという反省のもとに育てるのか、その位置づけをはっきりしておかないといけない。きれい言葉だけを使って現実には動かない、それではだめだと。それと、松本章延先生にお願いをして、謡曲「高砂」の5分バージョンということで、謡って覚えようと「四海波」と「高砂」と「千秋楽」を高砂商工会議所で指導していただいています。もしお時間がございましたら、ぜひともご参加ください。委員がおっしゃったように、言うのと実際どうかかわっていくのかは難しい問題ですが、私の基本的な考えは、せめて1000人くらい謡えたときに、高砂のまちはどこに行っても謡曲「高砂」が謡えるらしいとテレビに出して、そこで謡えると高砂はすごいなど、若い人も覚えられないといけないというようになる。行政が大々的にお金を使ってではなく、自然発生的なことが起こると、それこそ活性化していくと思うのです。まず自分が覚えて広めていくという思いでやっていますので、ぜひ参加していただけて勉強していただければと思います。

【委員】 委員がJCのときブライダルシティ高砂を宣言されて、私達もニュージーランドに高砂式結婚式をひきさげて行きました。当時はブライダルシティ高砂ということで、あちらこちら宣伝していました。何も初めから空白ではなかったのです。復活したらいいのです。

【委員】 次回謡が入ったMDか何かお持ちできませんか。

【事務局】 準備しておりますので、終わりましたらあとで聞いていただければと思います。

【議長】 今日は早めに終わって最後15分くらい聞いていただこうと思っておりました。みなさんのご意見をいただきながら枠組みとしては素案を中心に少し変えていきます。「づくり」という言葉をみなさんの意見を聞いて、変えていかなければならない。委員のおっしゃった「育てる」というのはどういうことなのか、それも踏まえて、文章を書かせていただこうと思います。全体の基本的な設計のところはご意見をいただいて原案を踏まえながら書き直すところは書き直していくということにします。今日は本当にどうもありがとうございました。

(2) 今後のスケジュールについて

【議長】 最後に、今後のスケジュールについて、事務局から説明願います。

【事務局】 資料21ページの資料9です。平成23年度から平成24年度文化振興基本方針策定スケジュール案を付けております。第1回の審議会において、基本方針の素案を3月に作成しまして、4月にパブリックコメントを実施する予定で計画していましたが、パブリックコメントまでにもう1回審議会を開催して、素案の最終確認をする必要があると考えております。5月の審議会では素案完成という形にさせていただきまして、6月にパブリックコメントを実施したいと思います。次回の審議会までに本日審議していただいた基本方針にあわせて、具体的な方策やイベントの案を検討していきたいと思っております。資料を郵送等で送付させていただきますので、ご意見をお聞かせくださいますようお願いいたします。次の第4回文化振興審議会の日程についてですが、平成24年の5月の前半で考えていますが、先のことになりますので、予定として5月7日から5月18日の間で1日設けさせていただいて、日程が決まり次第お知らせするというようお願いいたします。時間は同じ時間でこの部屋で考えておりますので、後日連絡ということをお願いいたします。

【議長】 長時間に渡りありがとうございました。

5. 閉会

【司会】 これにて散会いたします。ありがとうございました。